

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月8日現在

機関番号：32657
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2009～2011
 課題番号：21520029
 研究課題名（和文）メルロ＝ポンティの存在論構想における「芸術」の寄与

研究課題名（英文）Contribution of the Art in the ontological conception by Merleau-Ponty

研究代表者
 本郷 均（HONGO HITOSHI）
 東京電機大学・工学部・教授
 研究者番号：00229246

研究成果の概要（和文）：フランスの現象学者メルロ＝ポンティの遺稿草稿（『眼と精神』の下書きやメモ類、およびゲスタルト派の芸術心理学者アルンハイムの読書メモ、『見えるものと見えないもの』関連の未刊草稿など）の調査を行った。また、晩年のメルロ＝ポンティの他の芸術に関する考察に対して取っていたスタンスを、メルロ＝ポンティ自身の前期の「セザンヌの懐疑」における考え方と比較・考察し、かつミシェル・アンリという哲学者の芸術論とを比較することなどを通して、メルロ＝ポンティの後期存在論構想に対して、「芸術」が果たしている役割が根本的であることが確認された。

研究成果の概要（英文）：This research deals with french phenomenologist Merleau-Ponty's posthumous manuscripts on "Eye and mind", "The visible and the invisible", and many notes on the book of R. Arnheim (Art psychologist). It makes clear some influences from the other philosophers and art historians to him. And the comparison with Michel Henry's "Seeing the invisible" sheds light on the important role of the Art at the starting place of the ontological conception of Merleau-Ponty.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・哲学・倫理学

キーワード：現象学・芸術・絵画・存在論・メルロ＝ポンティ・アンリ

1. 研究開始当初の背景

本研究開始当初、メルロ＝ポンティの哲学において、晩年の「芸術」に関する探求が、「存在論」構想の中で、どのように位置づけられ、どのような役割を担っているか、これはさほど明確なものではなかった。一方で、とりわけ『眼と精神』という芸術論が、この

時期のメルロ＝ポンティの精華であることは周知の所である。しかし、メルロ＝ポンティの急逝は、このテキストと、遺稿草稿およびメモとして残された『見えるものと見えないもの』における諸観念・諸概念との関連を、明確なものとして理解させることなく、断ち切ってしまった。そこで本研究にお

いては、メルロ＝ポンティに内在的な方向と外在的な方向との2面のアプローチを行おうと考えた。メルロ＝ポンティに内在的なアプローチとしては、『眼と精神』の成立過程を記録していると考えられる草稿群の調査を行うことで、晩年のメルロ＝ポンティの意図をより明確にできるのではないかと考えた。また、外在的な方向としては、芸術について深く論じた他の哲学者たちとの比較を行うことで、メルロ＝ポンティの独自性を浮き立たせることが出来るのではないかと考えた。これが、本研究を開始するにあたっての背景にあった動機である。

2. 研究の目的

メルロ＝ポンティの哲学が、行動－知覚の現出論的な立場から、後期の存在論へと転回していく展開過程において、その構想の出発点ないし手がかりとして「芸術」が果たしていた役割は、公刊された講義ノートなどからも既に読み取ることが出来る。ここで芸術が問題となっている理由は、特に近現代の芸術で問題となるオリジナリティを、文字通り〈起源に根ざしていること〉として理解するとき、芸術と「存在」との近さが明確になるという点にある。ある作品がオリジナルであるということは、その作品が、自立（律）的に存在していることを意味するからである。最後の著書『眼と精神』エピグラフとしてセザンヌの「私が翻訳しようとしているのは〈中略〉存在の根そのもの…」という言葉が引かれていることがその傍証となるだろう。「いかなる絵画理論も一つの形而上学である」と言われるように、芸術（ここでは絵画）は、存在そのものと同根なのである。この点を捉えることが本研究の端的な目的である。

3. 研究の方法

上記の研究の目的においても示したことからも明らかなように、この問題の要点は、芸術と存在そのものとの等根源性にある。このことはしかしもちろん自明なことではない。したがって、ここで研究方法として要請されるのは、次の二つの基礎作業であった。

(1)遺稿調査：まず第一に必要な作業は、メルロ＝ポンティにおいて、この等根源性が何によって確保され、どの

ようにしてそれが存在論の基盤として立てられているのか、この点を明らかにする必要があった。ここでその手がかりになると考えられたのが、『眼と精神』の成立過程である。『眼と精神』は、美術史家A. シャステルによって依頼された原稿であるが、この原稿の執筆までは少なくとも1958-1959年講義などでは取り上げていたにせよ、明確に芸術を議論の対象とした論考の発表をしばらく行っていなかった。その点で、この遺稿を調査し、『眼と精神』の成立過程を追うことが可能であれば、この構想の基礎を推し進めることができる。そのために、公刊されていない遺稿（現在はマイクロフィルム化されている）に当たることが不可欠であった。この遺稿は、現在まだメルロ＝ポンティの著作権が切れていない故に、フランス国立図書館に所蔵されているものを見る以外にはアクセスする方法がない。よって、3年間に亘って、その調査を行い、基礎的な資料収集がまず必要であった。

(2)比較考察：第二に必要なことは、上の内在的なメルロ＝ポンティ哲学における芸術の位置づけ解明と同時に、他の哲学者たちが、芸術と存在との関係についてどのような思索を行っているか、この点についての比較検討が必須である。この芸術と存在との等根源性が、決して自明なことではなく、むしろ、その関係性こそが一つの根本的な問いとなるからである。その点で、とりわけ、ミシェル・アンの『見えないものを見る』、ハイデガーの『芸術作品の根源』、デリダやマリオンの諸論考などが比較の対象として挙げられる。メルロ＝ポンティ哲学における芸術と存在そのものとの関係の位相を明らかにするためには、この比較という方法を取る必要があった。

4. 研究成果

メルロ＝ポンティの後期哲学の軸となる存在論構想において、「芸術」がどのような役割を果たし、どのようにその構想成立に寄与しているかを解明することは、未刊のままに終わった『見えるものと見えないもの』の構想全体に関わる視点確保を可能にする。このような全体的な視野のもとで、今回の研究において得られた成果は、以下のようにまとめることができる。

(1) 遺稿草稿の研究について

今回の研究においては、特にメルロ＝ポンティの最後の公刊論文『眼と精神』に焦点を当て、とりわけ、フランス国立図書館に所蔵の『眼と精神』遺稿のマイクロフィルム（マイクロフィルム番号MF9586）の読解を進めてきた。これに加えて、そのための基礎研究の一端とも考えられるゲシタルト心理学者アドルフ・アルンハイムの『美術と視覚』初版の読書メモ（マイクロフィルム番号MF9586）の読解、『見えるものと見えないもの』の準備草稿に含まれる1959年に執筆された構想メモ（マイクロフィルム番号MF9849）の一部の読解も行った。

難読の手稿のため、想定外の時間を要したが、この調査を通じて明らかになったことは、次の諸点である。〈否定的な結果〉と〈肯定的な結果〉とについて述べる。

〈否定的な結果〉：遺稿そのものから、『眼と精神』の成立過程は確定できない。

①残念ながら、この遺稿(MF9586)は『眼と精神』の草稿全体を含むものではないと思われる。散逸したものが多くあるものと推定できた。

②この遺稿は『眼と精神』の成立過程の順序で配列されているものではなかった。書き出しの部分については5種類ほどのヴァリエーションが収められているが、後の部分についてはまったく含まれていないものも多い。

③手稿であることに加え、マイクロフィルムの状態が良好とはいえないため、大変読みにくく、結果として解読不明な箇所が数多く残ってしまったことは遺憾である。

〈肯定的な結果〉：明示されていなかった影響関係が明確になった。

①『眼と精神』の執筆を依頼した美術史家シャステルから幾つかの着想を得ていたらしいことがノートから判明した。

②同じく美術史家パノフスキーの研究（具体的な書名は挙がっていない）と関連させて、絵画の問題が、間人間的な関係の理念の問題かつ存在への関係の理念として捉えられ、あらゆる哲学のモデルであると考えられている。既に、晩年の講義でもこの視点は語られ

ているが、『眼と精神』も、同様の視点に立つものとして構想されていることが判明したことは、重要であると思われる。

③『眼と精神』本文、あるいは、他の著作などではほのめかされていたに留まるメルロ＝ポンティの存在論への転回が明確かつ自覚的に遂行されていることが裏付けられた。少なくとも、メルロ＝ポンティ自身の自己解釈においては、『知覚の現象学』のレベルでは、存在論を含んではいないことになる。

④タイプ原稿（ほぼ最終稿に近いものと推定される）『眼と精神』末尾の一文に変更（厳密には削除）が生じていることが判明した。この削除の意味は、更に『眼と精神』全体の構想に基づいて判定すべき性質のものであるため、現段階で軽々に結論づけることはできないが、芸術の問題が存在論の問題のみならず、政治的な性質の問題との連繋において考えられていたこと

（これまでのところでは、両者はあまり積極的に繋がるものとは考えられてはいなかった）を伺わせる。このことは、従来見落とされがちであったメルロ＝ポンティの存在論構想において、芸術だけでなく、政治的なものの意味も共に提起しているという点で、新たな光を当てることを可能にしていると考えられる。もちろん、最終的にはその文言は削除されているため、削除されたことの意味も同時に考察されなければならない。

⑤アルンハイムの著作『美術と視覚』（初版）に関しては、かなり綿密なノートを取りつつ本を読み進めている。とりわけ関心を持ったのは、第5章「空間」の章であると思われる。他の章が、少ないところでは2枚ほど、多くて7枚（第三章「形態」の章）ほどであるのに対して、「空間」の章では17枚を費やして丹念にノートを取っている。確かにアルンハイムの原書も、「空間」の章は70頁ほどあり、他の章が30～50頁であることを考えると大きな章ではある。とはいえ、メルロ＝ポンティの取ったノートの分量比を考えると、やはりこの章に強く関心を持ったことが推定できる。さらにここでは引用メモよりも、メルロ＝ポンティ自身によるコメントが多いことも注目を引く。

次に以上の草稿の検討に基づいた考察を記す。『眼と精神』を単に芸術論として、あるいは存在論の応用編として

ではなく、むしろ「真理の起源」あるいは「見えるものと見えないもの」という彼の存在論構想における基盤であり一種の『論理学』（ヘーゲル的な意味での）として解釈する可能性があるのではないか。この可能性を更に探ることが次の課題の一つである。

(2) 内在的および外在的比較

次に、いくつか比較を行いメルロ＝ポンティの芸術の問題について検討をした。この点について報告する。

①まず、メルロ＝ポンティ自身のテキストに即して、メルロ＝ポンティ哲学内部における問題の移行を確認するために、前期の「セザンヌの懷疑」（1945年）と『眼と精神』との比較を行った。

前者と後者とでは、要所要所で、よく似た表現が現れる。たとえば、前者では、自然発生的な組織化というような表現、後者では、自己形象化というような表現である。しかし、その前後の文脈から考察すると、前者では、セザンヌがその組織化を描く、という主体－客体の関係の枠組みが（少なくとも言語表現の水準においては）置かれた状態のままであるのに対し、後者では、絵画が自ずと形象化する（画家はその時世界に身体を貸している）と捉えられるという点で、大きな違いを認めることができる。

前者では、絵画の問題は、画家の（ここではセザンヌの）実存の問題へと接続されて、絵画そのものの問題からは離れていく。一方、後者では、芸術（絵画）そのものの問題へと沈下していくことで、逆に画家個人の問題からは離れていく。さればこそ、前者ではセザンヌという個人に徹底的に付き添ったが、後者では、一人の芸術家だけではなく、作品だけでもなく、芸術という営為そのものに付き従おうとしたのである。ここに、前期と後期の位相の違いを捉えることができる。

前期においては、現象学的と同時に実存主義的な観点からの絵画解釈を行う限り、そこでは画家の生の問題と作品とを連続的に考えることになる（一方を他方に還元するという単純な形ではない）。ここでは、芸術の位置づけは、一つの範例として、いわば相対的である。一方、後期においては、世界と人間との根源的な絡み合い・浸蝕の相において芸術が捉えられており、そ

の意味で、メルロ＝ポンティの哲学が当初より持っていた意図（世界が生まれ出るところに立ち会うこと）と同根のものとなる。その意味で、芸術の問題が哲学のモデルとなり得るし、また哲学が存在について語りうる可能性の根拠を与えることになる。

以上のように、この比較考察からは、メルロ＝ポンティの哲学における芸術の寄与の意味が前期と後期とで異なってきたこと、特に後期の存在論にとってはその寄与の意味が根本的であることが明確になったと言えることが出来る。

②次に、ミシェル・アンリの哲学、とりわけ、『見えないものを見る』というカンディンスキー論との比較検討を行った。

ミシェル・アンリ哲学の根本性格は徹底した「内在」にあるが、これと比較する意味でメルロ＝ポンティ哲学の根本性格を「超越」として押さえることが可能である。アンリの内在の哲学は、とりわけ感性性において明らかになるが、これと芸術（カンディンスキー）との関係としては、とりわけ「表現」という問題系において論点となってくる。しかし、アンリの場合、これを内在の表現として言い表してみると、幾分かの問題が発生してくることが、メルロ＝ポンティの思考の側からすると見えてくる。そこには表現するものと表現されたものとの隔たりが生じざるを得ず、かつ、表現手法という形で、理論的なものの媒介を必要とする（特に絵画においては）のであるが、一方で、アンリはあくまで内在の直接性を主張するという点で、齟齬が生じてしまうのである。このことは、メルロ＝ポンティに即してみると、既成の理論とその乗り越えというダイナミズムを如何に捉えるか、という問題となる。このときに要点となってくるのは「制度化」という論点である。制度は、芸術家の創造過程においては、桎梏となると同時に踏み台となるという二重の役割を果たす。これはまた一方で鑑賞者においても同様のことが発生するのであり、その間に芸術（家）の理論が生成されることになる。メルロ＝ポンティの議論からすると、その点で芸術は、この制度化の一つのモデルと捉えることができるであろう。

このように、アンリとの比較において明らかになるのは、メルロ＝ポンテ

イにおける芸術の位置づけが、直接的なものにおいて生起している隔たりの作用（時間化とも空間化とも言い難い根源的隔たりの生成）、つまり内在的超越を明らかにすること、そしてその作用は、可逆性の運動として顕わになること、こうした点である。

(3) 今後の展望について

以上の研究から明らかになったことを踏まえ、今後さらに探求・考察を進めていくべき方向性としては以下のようになると考えられる。

①『眼と精神』については、主にその外的な成立過程の問題をこれまで調査してきた。これを承けて、次には『眼と精神』の内的な構造とその外部との相関・影響関係について調査を進める必要がある。ここでは、セザンヌに限らず、クレー、マティスなどの芸術家たちとの交錯をさらに調査し、『眼と精神』の議論、ひいてはメルロ＝ポンティにおける芸術の位置づけの問題を、内的にさらに検討していく。

②他の哲学者との比較検討という点では、アンリに続いて、ハイデガー『芸術作品の根源』との比較検討を行う必要がある。遺稿の調査から判明したことであるが、ハイデガーの影響は、芸術論に関する限り、あまり見られない。時期的には『芸術作品の根源』は1950年の『杣道』に収載され、1960年にはレクラム文庫に入っているのだから、メルロ＝ポンティが見ているもおかしくはないのだが、そこが遺稿上では確認できない。その点で、このテキストとの関係の検討が、メルロ＝ポンティにおける芸術の位置づけについて却って光を当てることが出来るのではないかと考えられる。

③芸術の問題が、仮に上に述べたように、メルロ＝ポンティ存在論の基盤に位置するとした場合、その射程がどこにまで及ぶものであるか、これについての考察が最終的には行われなければならない。そのための手がかりが今回の研究によって既に得られたものと考えている。

以上、本研究における成果として報告する。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

(1) 本郷均、「メルロ＝ポンティと二分法」、『メルロ＝ポンティ研究』第16号、メルロ＝ポンティ・サークル、2012年9月刊行予定、査読有(掲載決定)。

(2) 本郷均、「直接性の隔たり 絵画と音楽を中心として」、『ミシェル・アンリ研究』、第2号、日本ミシェル・アンリ哲学会、2012年5月、47-65頁、査読有。

(3) 本郷均、「メルロ＝ポンティのアルンハイム・メモについて」、『総合文化研究』、第9号、東京電機大学、2011年12月、227-231頁、査読無。

(4) 本郷均、「メルロ＝ポンティ『眼と精神』の草稿について」、『総合文化研究』、第8号、東京電機大学、2010年12月、151-154頁、査読無。

〔学会発表〕(計2件)

(1) 本郷均、「両義性と可逆性」、実存思想協会シンポジウム「メルロ＝ポンティ研究の今」提題、2012年3月26日、東京大学。

(2) 本郷均、「表現と直接性の隔たり アンリ・メルロ＝ポンティ・カンディンスキー・シェーンベルク」、日本ミシェル・アンリ哲学会第3回大会、2011年6月11日、立命館大学。

〔その他〕

ホームページ等

<http://homepage3.nifty.com/mpc/page001.htm>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

本郷 均 (HONGO HITOSHI)
東京電機大学・工学部・教授
研究者番号：00229246

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし